



公益財団法人
長尾自然環境財団



公益財団法人長尾自然環境財団

〒130-0021 東京都墨田区緑4-20-9 宮野ビル3階

電話 03-6659-2070

FAX 03-6659-2272

E-mail secretariat@nagaofoundation.or.jp

URL <https://www.nagaofoundation.or.jp>



(Printed in 2024)

NEFについて

長尾自然環境財団(NEF:Nagao Natural Environment Foundation)は、1989年の設立以来、アジア・太平洋地域を中心とした開発途上国の自然環境保全の推進に取り組んでいます。この目的を達成するため、自然科学等を学ぶ学生への奨学金の支給や、現地の研究者が行う調査研究や保全活動の実施に対する助成などを行っています。

人材養成事業

将来の自然環境保全に貢献できる人材の育成を目指し、関連分野を学ぶ東南アジアの開発途上国の大学生や大学院生に給付型奨学金を支給しています。現在、ベトナム、ラオス、カンボジア、バングラデシュの4か国で、各国協力機関の支援を得て本事業を実施しています。1991年の本事業開始以降、9か国で約8,800人の学生を支援しました。

研究費等の助成

研究助成事業

アジア・太平洋地域の開発途上国の現地研究者による調査研究の実施や研究成果の公表に対して助成を行っています。助成活動を通じて、自然環境保全の分野に従事する若手人材を育成し、保全対策に必要な情報を収集します。申請の締め切りは4月と10月の年2回で、外部委員で構成される研究助成選考委員会が審査を行います。2024年7月までに、580件を超える研究プロジェクトを支援しました。

研究助成プログラム

自然や生態系、生物多様性に関する知識を深め、また今後の保全対策に貢献する調査研究や情報収集を行う若手研究者や博士課程の学生に対して研究資金を提供します。研究者個人への助成のため、チームや団体が実施するプロジェクトは対象外です。助成期間は1～2年、助成金の上限額は100万円です。

助成研究の終了後、査読付きジャーナルに研究成果を公表する場合、費用の一部を支援します。助成研究1件あたり最大1,000米ドルを助成します。

学術出版助成プログラム

自然環境保全に関する知識を広めるため、申請者の研究成果をもとにした書籍の出版に対して助成を行います。助成金の上限額は100万円です。

若手研究者育成事業(CGFプログラム)

2016年に開始したCGFプログラムの目標は、アジア・太平洋地域の開発途上国の若手研究者が、現地の野生生物や生態系保全に関連する分野で、世界をリードする研究者に成長することです。CGFプログラムの対象者は、現地の大学や研究機関に勤務する研究者(資格A)と、日本の大学の博士課程に入学している留学生(資格B)です。助成金の上限額は、資格と研究場所に応じて、1件あたり150万円から250万円です。申請者(プロジェクトサイエンティスト)は、メンターとなるプロジェクトコーディネーター(原則として日本の大学や研究機関で研究者として勤務した経験のある優れた研究者)とともにプロジェクトを実施します。

申請の締め切りは年2回、7月と1月で、CGFプログラム運営委員会が審査を担当します。2024年7月までに、27件の研究プロジェクトを支援しました。

長尾湿地基金(NWF)

ラムサール条約は、多様で生産性の高い生態系である湿地の保全と賢明な利用の促進を目的としています。アジア・オセアニア地域の開発途上国の地方自治体、研究者、非政府組織、地域コミュニティによるラムサール条約の実践、特に『ラムサール戦略計画2016-2024』の目標達成に向けた活動を支援するため、2016年にNWFは設立されました。湿地の保全、復元、賢明な利用、CEPA(対話、能力養成、教育、参加、普及啓発)活動に関するプロジェクトなど、2023年までに19件のプロジェクトを支援してきました。NWFの詳細については、ラムサール条約のWebサイトをご覧ください:

URL: <https://www.ramsar.org/nagao-wetland-fund>

自然環境保全プログラム

2006年開始の総合研究・活動事業のもと、地域コミュニティ、地方政府、研究者、日本の専門家と協力して、東南アジアで自然環境の保全に必要な科学的知識の集積や保全活動を行ってきました。これらの活動を通じて、現地の人材、特に若手研究者の育成や能力向上、技術移転等にも取り組んでいます。

現在、ラオスとベトナムで2023年から3年間のプロジェクトを2件実施中です。ひとつは、田金秀一郎准教授(鹿児島大学)が主導する「**ラオスとベトナムの石灰岩カルストにおける植物多様性評価**」です。このプロジェクトは、石灰岩地域の植物種の多様性を解明し、植物標本のデータベースを構築し、植物学分野の若手研究者を育成することを目的としています。もう一つは、本川雅治教授(京都大学)が主導する「**インドシナ山脈の陸生小型脊椎動物の種の多様性**」です。このプロジェクトは、山岳地帯の陸生小型脊椎動物の種の多様性を理解し、標本管理インフラを改善し、次世代の研究者を育成することを目的としています。

2024年には、新たに2件のフィージビリティスタディを開始しました。鈴木愛博士(立命館大学)が主導する「**バングラデシュ北東部の内陸湿地におけるスナドリネコの調査と保全**」は、現地の学生、林業局職員、住民とともにスナドリネコに関する科学的データを収集し、そのデータをもとに保全策を立案・実施します。前田健博士(沖縄科学技術大学院大学)主導の「**フィリピンの回遊性魚類相に関する共同研究体制構築に向けた予備調査**」は、フィリピンの河川に生息する魚類相と黒潮に沿った仔稚魚の分散メカニズムを解明するため、フィリピンと日本の研究者による共同研究体制を構築します。